

# 栗野・徒然日記

式帖の巻・冬

令和二年十一月から綴り始めた「栗野・徒然日記」を、**春(三〜五月)**、**夏(六〜八月)**、**秋(九〜十一月)**、**冬(十二〜二月)**の季節ごとに再編集しました。  
栗野の四季折々と日常をつれづれなるままに。

それでは一筆!!

2021.12.8

## 閉塞成冬(そらきむくふゆとなる)



2日間、しとしとと降り続いた雨も上がり、しっとりとした風が、心地良く感じられる朝を迎えました。気温も比較的高いため、少し早歩きすると汗ばむほど。コートやマフラーが荷物になってしまいました。とは言え、季節は、「空寒く冬となる」候。今日は北西風が冷たい1日になるとか。数日前に冠雪が見られた伊吹山から、栗野にも吹き下ろす風(伊吹おろし)がこたえる季節になります。

今日は真珠湾攻撃から80年。現地時間の午前7時55分に攻撃が始まりました。太平洋戦争の開戦です。当時、我が国では大東亜戦争と呼称し、戦後になっても、戦後生まれの私たちでさえ、じゃんけんの時には「じゃんけん建設大東亜」と叫ぶほど、戦争の名目が子どもたちまで浸透していました。

NHKテレビでは、関連の番組がこのところ連日、放送されています。今朝の子ども向けの番組では、「昨日生れたタコの子が タマに当たって名誉の戦死 タコの遺骨はいつ帰る 骨がないから帰れない タコの母さん 悲しかろ」と「湖畔の宿」の替え歌を紹介していました。

しかし今日、自由と平和への脅威が、一方的に増していると感じるニュースが、連日流れます。

今も世界のどこかで人権と平和が脅かされている、理想からかけ離れた現実を直視しながら、人類の叡智を集め、課題を紐解き、困難を乗り越え、人類として、進化と発展を遂げていかななくてはなりません。社会、心、そして暮らしを、冬の時代にさらしてはならないと、世界の片隅から願う……。

サルトリイバラの実が色褪せてきた一方で、イネ科の草葉が赤や黄色に色付いた「草紅葉(くさもみじ)」が、今朝、のぼりはじめた陽に輝きます。

### 2021.12.8 これまでの日記(バックナンバー)をアップします。

これまでの日記を、春・夏・秋・冬に再編集して順次アップします。まずは、日記を掲載し始めた2020年11月末から、2021年2月までの「[栗野・徒然日記 其の一・冬](#)」をお届けします。ほんの1年前の栗野のまちが、いつの間にか宅地化が進むなど、刻々と姿を変えています。続けられる限り、今後も写真に撮り、日記に記録していきたいと思えます。皆さんからの情報もお待ちしています。

## 2021.12.13 続・生涯学習事始め



## 2021.12.15 熊糞穴 (くまあなにこもる)候 ジビエと鯖寿司



ふた昔前の生涯学習と言えば、趣味やお稽古事、教養を個人が身に付けるため、との解釈が一般的でした。今では、「学んだことを社会に還元する」生涯学習の役割が重視されるようになりました。そんな難しい話ではないのですけれど、社会にはまだ浸透しているとは言い難いですね。例えば、公民館のサークル活動。高齢者の施設で合唱を披露されることもそうですね。

平成10年代半ばに、岐阜市で開催された大会で、全国から集う人を対象に、岐阜市自治会連絡協議会が「おもてなし運動」(平成元年度にスタート)の一環として「アットホーム運動」を展開しました。岐阜市に訪れた人々にくつろいでいただくという趣旨。宿泊施設にポップアップのリーフレットを配布したのですが、それに添えられたのが、手づくりのしおり。かわいいイラストや押し花がデザインされています。製作したのは、各地区の公民館のサークルメンバー。イラストは絵手紙サークルの皆さんが担当され、玄人はだしの作品が寄せられました。学んだこと、趣味がまちづくりの活動につながった好例と言えます。コロナも少し落ち着き、公民館活動も再開されつつあるようです。

熊が冬眠すると言われる季節、今季一番の寒気がやってきました。週末は初雪の予報も。

近年は、ジビエ料理を地域おこしに活用する動きも盛んになっています。森林被害をもたらす鹿もそのターゲットに。今から40年ほど前にも、美濃加茂市にある「[古井の天狗山](#)」の近くの食事処で、シカ肉が供されていた記憶があります。また同時期、植林した杉を守るため、オオカミを輸入して山に放つ構想が、確か和歌山県だったと思いますが、まことしやかに話し合われていると聞いたことがあります(事実でしょうか)。

お隣の本巢市にある道の駅「[織部の里もとす](#)」に、鹿の冷凍モモ肉の薄切りが売られていました。興味深々で購入し、オリーブオイルにニンニク、塩、黒コショウで炒めるというよりは煮る感じで調理しました。あっさりとした味で、さして臭みもありません。何の肉に似ているかと問われても、思い当たりません…鹿肉です。道の駅には、鯖寿司も並べられていました。その昔、根尾の山里では、福井から行商人の越前歩荷(ぼっか)が、温見峠を越えて運んできた塩漬けのサバは、貴重なたんぱく源だったそうです。保存の効く寿司にし、祭りや祝い事あるいは田植えや稲刈りの合間に振る舞ったそうです。これがその実物か、とちょっと感動し、買いました。多少の日持ちはするようですが、早速夕餉にいただきました。普段食べている鯖寿司とは別物の感。すし飯はやや甘め。風土の歴史が刻まれた一品でした。伝統料理の継承と食材を使った新たなメニュー開発への挑戦は、地域おこし、そして食育のアイテムとしても、すっかり定着してきたようです。



◀ 山里の鯖寿司…その昔、山里の貴重なたんぱく源だったという。





▲今が開花期の吉祥草(キチジョウソウ)と同様、真ん中の富尊草(フッキソウ)も、新年を迎えるのにふさわしくおめでたい名前。右のノボロギクは年中咲いています。

今日は、栗野にも初雪がちらつきました。とは言え、屋根にうっすらと積もった程度で、昨日からテレビで警戒情報が流れていたことを思うと幸いでした。本格的な寒さに耐えながらも咲く花があります。

これまで、新・夏の七草、秋の七草を、独断で選定しましたが、今回は、冬の七草を取り上げたいと思います。余り知られていませんが、冬の七草に、白菜、大根、葱、春菊、小松菜、ほうれん草、キャベツの野菜を挙げることもあるらしいのですが、栽培種は野草から外れるし、いずれも開花期は冬ではないから、ちょっと無謀。その点、明治末期に植物学者が選定したのが、フキノトウ、福寿草、節分草、雪割草、寒葵、寒菊、水仙。これなら割としっくりきますね。ただ、節分草、雪割草はかなりレアな山草ですし、寒菊も栽培種でしょう。

これも参考に、新・冬の七草の候補を挙げてみましょう。日本水仙(ニホンスイセン)は、数日前から我が家の庭先に開花し始めました。越前海岸の野生種も今からが見頃でしょう。これは絶対外せません。また、寒葵(カンアオイ)の開花期は早春からですが、その名のとおり冬でも青々とした葉であること、岐阜ゆかりのギフチョウの食草でもあることから採用したいですね。年中青々としていて、庭のグランドカバーに良く用いられ、新年を迎える意味でも、名前が目出度い富貴草(フッキソウ)、吉祥草(キチジョウソウ)はいかがでしょうか。フッキソウは、開花時期が春になりますが、すでに蕾を付けていますし、キチジョウソウは今が盛りです。となれば、目出度いつながりで福寿草(フクジュソウ)も選んでおきましょう。咲くのはまだまだ当分先ですが、園芸店では正月の飾り物として寄せ植えがされていますね。これで5種類。ここからは少しマニアックなものになります。まずはヤドリギを推します。子供の頃、元浜町の河川敷の大木(おそらくミズナラ)が葉を落とすと、頭上高くの枝に着生したヤドリギが2株だけ青々とした姿を現したものです。足元には銀杏のような実が点々と落ちていました。先日久しぶりに行きましたが、樹木そのものが見当たりませんでした。次に、栗野台の団地が出来た以前は、我が家の庭にもいつの間にか芽生えていたフユノハナワラビ。最近は見かけませんが、小型のシダで、冬に花のような孢子葉を伸ばします。あとは、早ければ年末にも目を出すことのあるフキの蕾である蔦の臺(フキノトウ)を加えて、冬の七草は、ニホンスイセン、フッキソウ、キチジョウソウ、フクジュソウ、ヤドリギ、フユノハナワラビ、フキノトウでいかがでしょうか？ このほか、冬間近に昨ツワブキも良いかもしれませんね。といったところで七草プラスワンの揃い踏み。入れ替え自由。何かほかにふさわしい花があればお寄せください。

ちなみに、医者いらずのアロエは、この辺りでは戸外では咲きませんが、温暖化が進むと、今後は入るかも分かりませんね。また、ノボロギク(明治初期の帰化植物で全国に繁殖)も、15年ほど前から栗野にもようやく見られるようになり、冬にも関わらず咲いています(ただ年中咲いているので、季節感はありません)。広く知られてきた春や秋の七草も、時とともに、環境とともに、変わっていくかもしれません。



犬の平均寿命が今年、過去最長の14.65歳を記録した記事が、朝刊に掲載されていました。昭和30年代、野良犬なのか、放し飼いなのか分かりませんが、町中を成犬がうろついていました。交尾をしているのを子どもたちは囃子立てました。今では、放し飼いは原則禁止ですし、車が普及し始めた時代にはほぼ見かけなくなりました。野犬狩りが行われ、登録制度になり、町中には野良犬を見かけることもなくなりました。

その頃、隣家も犬を飼っていました。大きな赤犬(アカという名前でした。美濃柴犬だったのか、その雑種だったのかもかもしれません)が亡くなったとき、すぐ裏手の長良川の河川敷に埋めに行ったのを記憶しています。実家にも、フクと言う柴犬がいましたが、吠えられた記憶があります。残念なことに、若くして亡くなりました。今は、市民であれば、比較的安価に火葬してもらえますが(市外の方は1万円)、別れに立ち会った記憶はありません。

ノーベル医学・生理学賞を受賞した大村智さんが開発した、フィラリアの薬であるイベルメクチンのおかげで、犬の寿命は飛躍的に伸びました。味噌かけ御飯が主食だった食生活も、ドッグフード誕生(日本での販売は1960年だそうです)のおかげで、栄養的にも向上したのでしょうね(尻尾を振って喜んでいるかはわかりませんが)。室外に手づくりの犬小屋を置いて番犬として飼育されていたのも、今では犬種を問わず室内犬(座敷犬と呼びました)が多いですね。いずれにしても、犬の生活環境は、飛躍的に向上しました。一方、殺処分される数は、令和2年度に4,000余頭。引き取られる数が上回り、平成元年度の687,000余頭からは大きく減少しました。しかし、まだまだ奪われている命があります([環境省 統計資料「犬・猫の引取り及び負傷動物等の収容並びに処分の状況」平成31年度](#))。市内でも、保健所が月1回、愛犬探しの会を開催しています。平成6年に現場を見学したことがありました。きれいにシャンプーした犬には引き取り手がそこそこありましたが、生まれて間もない5、6匹の兄妹は引き取りがありません。木陰で泣いていた高齢女性の姿が忘れられません。引き取られていく幸せな犬は、ほんの少数でした。現在は動物福祉のためのNPO法人も活動しています。でも、あくまでも責任は飼い主にあります。

今年、8月に我が家のシーズーの雄が19歳と4カ月で息を引き取りました。散歩が大好きな子でした。散歩コースの畜産センターが豚コレラで閉園されていたため、他のコースに移りました。まだ目が見える頃は、センターで飼育されている子豚の赤ちゃんの群れに興奮していました。コースを変えて3年ほどは、1時間余りかけて、1kmほどを歩きました。すれ違った人からは、痛々しいとの声がかかりました。虐待と思った人もあったようです。亡くなる前の3カ月ほどは、大好きだった散歩をあきらめました。最後の1カ月ほどは、スプーンで口に好きなものを入れてあげなくてはなりませんでした。6代目の愛犬でしたが、半年たった今も、彼のことを記憶から遠ざける自分がいます。亡くなった後、たまたま入手した犬のぬいぐるみが部屋にいます。

近頃、ひっくり返りながらも一生懸命散歩している犬と、その飼い主の方を見かけると、心の中で「頑張って」と叫んでしまいます。



2021.12.25 お榊



今日はクリスマスですね。それはさておき、古くから神事に使われてきた木には、5月6日の日記に書いたオガタマノキなどがありますが、一番身近なのがおサカキですね。今では、9割が中国からの輸入品だそうです(日持ちが短い気がしますが…)

サカキは、比較的暖かい地域に自生するため、関東以北では葉が小さくギザギザしているヒサカキも使われるようです。どちらも、栗野には自生しています。今の時期は、いずれも黒い実を付けています(今年は虫に食われたような傷が目立つ葉が多いのが、残念です)。

最近では神棚を祭る家庭も減っていますが、お榊を供えなおし、新玉を迎えます。



◀近似種のヒサカキも、多くの実を付けていました。

2021.12.26 穂長



▲まだ、ウラジロが並ぶスーパーも見られます。

群落とまではいきませんが、栗野台でそれなりに見かけたウラジロも、最近では少なくなりました。陽当たりが良くなりすぎたのかも。それでも、西側に続く山林の陰には、ちらほら見かけることができます。

昔は鏡餅の下にウラジロの葉を引いて新年を迎えたものですが、鏡餅がプラスチックで包装されて売られるようになってから(鏡開きに青カビを落とす必要もなくなりましたね)、葉付ミカン(ダイダイ)とともに、使われることが少なくなったようです。

ウラジロのことを穂長と言うのを知ったのは、家紋のことを調べていて。檜の穂先のように長いかららしい。縁起の良い植物とされ、毎年2枚の葉をつけるので、花言葉は「永遠の契」。

家紋は、どの家にも伝わってきた我が国独特のもの。男紋、女紋と一家に二通り伝わっていることも。最近、シールにしてファッションブルに使われているようです。分家の際にデザインを少し変えたりするなど、独自性も込められている変わり紋もあります。デザインの的にも優れていると本当に感心します。権威主義の象徴などと言わず、家紋を楽しむ時代になりました。自分の紋が分からないときは、お墓や紋付の着物に残っていることが多いようです。ウラジロに花はつかないから、芽出しのような気もしますが、花開いてほしいとのオリジナルな願いが込められているのかも。



▲しめ縄や吊るし柿に交じって、ダイダイ(葉付ミカン)が売られていました。

いよいよ年も押し詰まってきましたね。お飾り(しめ縄)が、今年もスーパーに並んでいます。店によって品揃えに差があるようです。葉付きミカンやウラジロが置かれていない店も少なくありません。農家では自宅でこさえていたことを記憶しておられる方も少なくないことでしょう。数年前には、公民館で三輪地区の方を講師に、制作実習が行われたこともありました。

チンチン電車(路面電車)が走っていた頃、伊奈波の電停付近から神社の参道に、お飾りを売る露店がズラリと並んでいました。今のようにプラスチックは使われておらず、玄関の注連縄(玉飾り)は、ダイダイも実物、エビも藁で形作られたものが赤く彩色されていました。当時売られていたのに、見掛けなくなったものが、床の間飾り。掛け軸用に長い1本のヒカゲカズラの飾りでした。床の間どころか和室が少なくなった住宅事情を反映して需要がなくなったのでしょうかね。自動車のバンパー付近に飾って走行していたのも、昭和50年代まででしょうか。門松が山林を荒廃させるからと、紙の門松に変わったのは昭和30年代(荒廃は門松のせいなの?)。自治会を通じて配布されていましたが、平成10年頃にはなくなりました。市民の反対も表立ってはなかったようですが、島地区では自治会が独自に印刷配布しました。年が明けてから、各地区の神社やお寺で、しめ飾りなどを持ちってどんど焼きがなされていましたが、プラスチックが混じるようになってから廃止されました。昨今は若い世帯や集合住宅でしめ縄を飾る世帯は、ますます少なくなっているようです。とは言え、百均にもプチお正月飾りが並んでいます。神様をお迎えする風習から、正月気分を味わう楽しみ方に姿を変えながらも、お飾りの文化は引き継がれていくのかも知れませんね。昨日の日記の家紋に通じるものがあります。一方、年中、玄関に注連縄を飾っている地域も、伊勢神宮周辺や古くからの集落で見ることがあります。今も栗野でも見掛けることがありますが、昔は一般的だったのでしょうか。



## 2021.12.28 雪の年末

数年に一度とかの寒波が襲来、栗野の町も昨日の明け方近くから断続的に降り続けました。今朝は10cm前後の積雪に。8時(写真)に陽が射し始め、陽の当たる道路では、昼近くには溶けていきました。

日本水仙が寒さに耐え、咲いています。ぐるっとバスも、ほぼ定刻通りに走っています。



▲鳥羽川と眉山を望む(8時00分)



▲鳥羽川と眉山を望む(9時27分)



▲ほぼ定刻通りに栗野台に向かう“ぐるっとバス”(10時12分)



▶寒さに耐えて凍としたたずまいを見せる日本水仙



2021.12.31 雪下出麦(ゆきくだりてむぎのびる)



近くの畑に、今年は珍しく、麦が植えられていました。季節は「雪下出麦」の候。雪が降りしきる大晦日、青々とした麦が雪の下から覗いています。

コロナに振り回されて早2年が経とうとしています。新たな時代へ、力強い芽を育くむ年が迎えられますように。



毛昆布汁年越し鯛に後は蕎麦



2022.1.4 赤い実づくし



年末に積もった雪を残しつつ、粟野は新しい年を迎えました。トップの写真は、初詣にうかがった氏神さん(2021.1.3の日記参照)の境内にある南天とクマザサです。寒い時期ですが、赤い実があちらこちらで輝いています。庭にはサンシュ、クチナシ、オモト(万年青)、南天、千両、万両が、街路や公園のハナミズキやモチの木、山にはソヨゴ(冬青)、ツルウメモドキなど、年末に降った雪を被りながらひととき目立っています。お目出度い名前の種類が多いのもお正月らしいですね。ところで、ツブラジイにおおわれる金華山麓に、季節外れの紅葉と見間違ふのが、タマミズキの赤い実です。ツブラジイは粟野でも見かけますが、タマミズキは少ないようです。大龍寺から繋がる山の南の方向に1本、高木を見つけました。粟野西の方角からも良く目立ちます。

◀ソヨゴ(冬青)は、粟野台の団地の山際に見られます。ツルウメモドキも粟野台で時折見かけます。狭い庭の一画、雪の中にセンリョウの実が映えています。



◀コクチナシの実。

▶庭の片隅で、雪に映えるセンリョウの実。



▲年末に庭のクチナシの実を採り、栗きんとんを色付け。水の中に入れた瞬間に色が広がります。



## 2022.1.5 招き猫



食用油、冷凍食品などなど、生活必需品の値上がりが続くとのニュースが流れています。デフレ脱却どころか、世界的なインフレが懸念される年になる、との予測もあります。デフレの象徴と云えば、100円ショップを思い浮かべる方も多いのでは？ いわゆる百均は1985年に登場したそうで、その後店舗数は増え続け、一時期には、柳ヶ瀬の空き店舗に、目白押しで出店していました。数年前までは、岩野田地区にも、住居を改造したような小さな店がありました。今は、市内の川北(長良川以北)には長良東地区のスーパー内、鷺山地区のショッピングセンター内、北警察署近くの店舗などがありますが、随分減少した感があります。お隣の山県市のスーパー内2店舗とスーパー近くの1店舗が、栗野から一番近い店舗です。

消費税が値上がりしたのが響いているのか、一部の品物の質が変化したり、200円や300円あるいは1000円なんて品を置いている店も(百均にこだわる大垣市が本社のチェーン店もあります)。

とは言え、これが本当に100円なの、と驚愕する品も少なくありません。写真の招き猫は、ソーラーで右手を振り続ける代物…百均侮れません。

インフレを背景に、今後はどのように変化するのでしょうか？

## 2022.1.7 七草粥



今朝は、春の七草(七草以外の野菜や餅を入れる地域もあります)を具材に入れた塩粥を食べる七草粥の日。風習を守っている家庭も多いようです。

昨日、店頭で、七草のセットが売られていました(訪れたドラッグストアでは定価398円でした)。

春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ(ハハコグサ)、ハコベラ(ハコベ)、ホトケノザ(コオニタビラコ)、スズナ(カブ)、スズシロ(ダイコン)を指しますが、まだまだ花咲く季節には程遠いですね。カブとダイコンは、食用を意識した選定のように思えます。これまで、地域や新暦に合った夏、秋、冬の新・七草を選定し提案しましたが、春になったら、新・春の七草も選んでみたいと思います。

我が家は、秋に蒔いたミニダイコンと、ミズナとモチナの三草粥。一年の無病息災を願って、いただきま〜す。

## 2022.1.12 冬薔薇(ふゆそうび)



季節は「小寒」。大寒を経て節分までの30日間が「寒の内」。今年は寒気が繰り返し訪れ、一昨日の汗ばんだ陽気が嘘のようです。

年末まで我が家の玄関先に四季咲きのバラが花開き、蕾を伸ばしていただきました。初夏のイメージが強い花ですが、12月25日の誕生花はバラ。この時期に咲くバラは冬薔薇と言われます(トップ写真は、12月27日撮影)。通りかかった女性の方に、「冬薔薇ですね」と声を掛けられました(花好きで、かつ俳句でもやられているのでしょうか)。そんな冬薔薇も、さすがに年末の積雪と寒さで、蕾は固く閉じたままになりました。このまま咲かずに終わってしまいそうです。切り取って、暖房のきいた部屋の中に入れました。ちょっと以前は、暖房もない部屋だったため、咲かずに枯れてしまったものですが、ますます高齢となりゆく主人は、今では暖房に頼っています。食卓に飾って数日で、開花し始めました。冬薔薇の花言葉は「輝かしく」。でも、「一生懸命」とか、「耐え忍ぶ」の方が似合う気がします。

オミクロン株の影響もあり、コロナは第6波に入ったと言われます。感染者数も増えてきています。今年も耐え忍びながらも、一生懸命、地に根を伸ばしていくしかありません。



▲固い蕾を切り花にしました(1月5日)



▲数日で開花しました(1月9日)



▲冬は黒バラが似合う気がします(1月14日)



## 2022.1.14 雪の立木



強い寒気のせいで、栗野も雪の朝を迎えました。立木は、枯れ枝に雪をまとい、墨絵のようにたたずんでいます。午前中、雪は降り続きましたが、地温が高いのか、道路の雪は溶けてきました。

高山では、白い魔物と呼ばれる雪。子どもの頃の教科書に、十日町の挿絵が掲載されていた記憶が蘇ります。時折の雪景色を楽しむ地域の人には想像できないような雪との闘いの歴史と文化が、雪国には紡がれてきたのでしょうか。

冷たい風に凍てつくような寒さだけれど、地中では水が動き出し、春の準備をしているという「候水泉動(しみずあたたかをふくむ)」季節を迎えています。



▲降りしきる雪と栗の高木(8時42分)



▲一瞬の朝陽に霞む眉山(8時16分)

## 2022.1.15 花ごよみ・シモバシラ



雪がまだ溶け切っていない昼近く、我が家の北側の庭の枯れ草の茎に、氷柱ができていました。シモバシラの花です。名前の由来の氷柱は、枯れた茎に吸い上げられた水が凍ったものです。

9月7日の日記に、開花した写真を掲載しましたが、シモバシラのような白い花を、穂状に連なって咲かせます。でも花の名の由来ではなく、偶然なのです。

花ごよみでは、開花時期の植物を取り上げてきましたが、この光景、この現象は、この時期ならではの趣があります。

以前、シモバシラに出会った日野の達目洞の自生地でも、今頃、こんな光景が見られることでしょう。

## 2022.1.19 霜柱



今朝は、厳しい冷え込みとなりました。霜柱が、地面を持ち上げています。先日紹介したシモバシラの枯れた茎も、氷柱を更に厚着しています。

コロナの感染拡大が止まりません。岐阜県も過去最大の感染者数(461人)となりました。まん延防止等重点措置が、21日から2月13日まで適用され、飲食店での会食制限などが自治体により講じられます。一人ひとりの行動で、何とか乗り切りたいものです。

明日は大寒、寒さはピークに差し掛かります。



▲霜柱が地面を持ち上げ、奥に見えるシモバシラの氷柱も、先日より太く育っていました。



2022.1.19 初観音だるま供養

Mさんの投稿

昨年は中止になった大龍寺さんの初観音だるま供養が、16日、好天に恵まれ、営まれました。

かつては、例年1月の18日でしたが、岐阜まつりや美濃まつり同様、休日に行われるようになりました。午後1時から、だるま供養が開始。積み上げられた奉納達磨に、格式に沿って点火され、煙が上がります。次々に達磨が運ばれ、積み上げられて燃え上がる山へと投げ込まれる。いつものことながらの栗野を代表する風物詩の一つ。多くの参拝者でにぎわいます。

とは言え、今年は2年ぶりにもかかわらず、コロナ感染再拡大の影響でしょう、見物人は例年の3分の1とか。

コロナが早く収まることを祈る1日でした。



## 2022.1.21 百均のカ②～マイクロレンズ～



◀霜が降りた道端でタンポポが花開いていました。



◀綿毛にも霜が。

厳しい寒さが続いています。散歩に出かけるのもおっくうになりますね。

さて、ソーラーで右手が動き続ける招き猫を以前に紹介しましたが、これが本当に百円なのか、という優れ物や面白い魅力的な物が、百円ショップには沢山並んでいます。今回は、昨日の霜柱の接写にも使ったマイクロレンズをご紹介します。すでに愛用している方も少なくないかも。接写用のレンズに加え、魚眼と広角まで付いたセット価格 100 円…信じられない。特にマイクロレンズは、結構利用しています。付属のクリップに装着し、スマホのレンズをはさむだけ(2セット買って、魚眼レンズをあらかじめ取り付けてくと、野外撮影のいざというときに手間が省けます)。トップの写真は、マイクロレンズを装着して撮影したタンポポの花。肉眼では見えなかった霜のかけらが花卉に付着していました。

ちなみに、栗野から近い百円ショップは、山県市のバロー高富店近くに 1 店舗、大型スーパー内に 2 店舗。ぐるっとバスで、岐北厚生病院バス停留所で、ハーバス乗り換えて各停留所(宮前、平和堂高富店、イオンビッグ山県店)下車。バローまでは、岐北厚生病院から徒歩圏内といったところでしょうか。



▲レンズ部分に当ててはさむだけ。



▲苔もこんな感じに撮れます。



▲これも苔を接写したものです。





寒風吹きすさぶ今日この頃。落葉樹の蓑虫は、季節感に満ちていませんね。剪定され風通しの良い街路樹や庭木を好む種類もあるそうですが、言われてみれば、山では余り見かけませんね。なんと我が国に40から50種類、蓑虫の仲間がいるそうです。我が家の花ザクロに、毎年大量に発生する困り者の蓑虫は、小枝でミノを作るチャミノガ(ミノの長さ2.5~4cm)らしい。子どもの頃から見慣れている種類です。これに対して、枯れ葉でミノを作り、細い糸でぶら下がる種類が、オオミノガ(ミノの長さ4~5cm)。枯れ葉のミノを初めて見たときには違和感がありましたが、数少ない出会いは岐阜ではなかった気がします。オオミノガは近年、絶滅危惧種に指定している県もあるそうです(激減したのは、1990年代に日本に侵入してきた外来種である「オオミノガヤドリバエ」という寄生バエが原因らしい)。

種類によってミノの素材や形に違いが見られるようですし、まだまだ新種が見つかるかも知れないとも言われています?!

多くがミノの中で越冬するようですが(調べてみると、短い枝でミノを作るネグロミノガ、樹皮や地衣類でミノを作るアキノヒメミノガは、そうでもないらしい)、我が家の蓑虫は、すでにもぬけの殻。樹木にとっては害虫でも、今年もお目にかかれるか、少し心配ではあります。

厳しい寒さが続いています。散歩に出かけるのもおっくうになりますね。蓑虫みたいに閉じこもってしまいそうです。



▲少し長めの小枝を蓑に用い、枝にもしっかりとくっついている蓑虫。チャミノガらしい。



▲鳥羽川河川敷のノバラに、ミノムシ1匹、発見。

2022.1.27 油断…再び?!



先週の暖かな昼下がり、小学校周辺を散歩していた時、新築家屋には、集合住宅までもが屋根にソーラーパネルを設置しているのに気がきました。岐阜市は、年間の日照時間が長いので、太陽光発電には向いていると聞いたことがあります。一方、週明け月曜日(24日)のNHKの朝のニュースで、ソーラーパネルが廃棄時期を迎え、処理に困っていると伝えていました。太陽光発電が人気となり、パネルが出回り始めた20年前と言え、リサイクル社会が認知され久しかったはず。環境への負荷の軽減が謳い文句の太陽光発電で、処分段階まで考えた製造プロセスが描かれていなかった?!

ガソリンの価格が、更に急騰しました。

資源に乏しい我が国にとって、また地球温暖化対策として、たびたび話題になってはまた水泡に帰してきた再生可能エネルギー(太陽光のほか、風力、水力、バイオマス、地熱など)の検証が、身近なテーマに感じられる今日この頃です。



▲多くの新築住宅の屋根にソーラーパネルが見られます。



▲ガソリンの値引きや生活必需品の買い物など、企業から行政まで、スマホを利用すれば割引されるサービスが拡大しています。スマホに不慣れな人にとって、生活格差、情報格差が心配されます。





雀膨らみ、鴨の群れが流れに身を任せ、ダイサギが川べりに立ち尽くす…鳥羽川に鳥たちが集まっています。鶏始乳（にわとりはじめてとやにつく）候を迎えました。寒い時期には卵を産まなかった鶏が、鳥屋の中で卵を抱く季節という意味だそうです。官玉子は、特に貴重で滋養ある食べ物でした。昔は、朝になると鶏の声で目が覚める時代でした。市街地に住んでいた子どもの頃にも、川を挟んだ早田地区から、聞こえてきました。30年ほど前、道三まつりの露店で雌のヒヨコが売られていました。確か350円とオスに比べ倍ほどの値段でした。近所迷惑にならないようにと雌を選んで1羽だけ買い求めました。子どもの頃にお彼岸に西別院の露店で買ったヒヨコは、電球で温めたにもかかわらず、寒さで死んでしまいました。室内で温め、すくすくと育った鶏は、ある日、コケッコォと鳴いたのにはびっくり仰天。雄鶏でした。

平成10年代、鳥インフルエンザが発生したのを受けて、業務継続計画の策定を各機関が進めていました。ライフラインの維持や戸籍などの窓口業務の在り方を検討するものでした。以降、杞憂に思われた取り組みが、新型コロナの感染拡大によって、現実のものとなりました。しかし、当時立案された計画が今回役に立ったのかどうかは定かではありません。むしろ、実践的な対応を日々迫られたのではないのでしょうか。

しかし今、オミクロン株の出現により、さまざまな業務の担い手が不足しつつあります。

1月28日(金)の感染者数は、県内で866人と過去最多となりました。年が明けて1カ月もたたない間での感染爆発です。予防に努め、収まることを願うしかありません。



▲ダイサギの横を流れに身を任せた鴨が通り過ぎます。



## 2022.1.31 春見つけ①～枯野を歩く～



厳寒の候、陽射しに誘われて散歩に出かけます。でも風は思いのほか冷たく、マフラーを持参して良かったア。

鳥羽川の河川敷を踏み分けて行くと、木に巻き付いた蔓に様々な実がフぶら下がっています。みな枯れ朽ちた姿になっていて、名前は定かではありません。野バラの実もほとんどが熟れ過ぎていますが、まだ赤く形をとどめているものもあります。なんと青々とした葉を開き始めた株を発見。今日は、何故かサギもカワウも見かけません。魚影も川面にはありませんが、草木は着実に春を感じ取っているようです。

気を付けて歩いていたのですが、枯草を分け入ったので、ズボンには、センダングサの実がビッシリ。ちょっと厄介なお土産です。

## 2022.2.1 春見つけ②～堤を歩く～



◀オオイヌノフグリなんて名前が、気の毒な愛らしさ。明治時代にヨーロッパから伝わった帰化植物です。



▲熟しきったノバラの実。原形をとどめている実もチラホラ。



▲青々と芽吹き始めたノバラに、春を見つけ!!



▲菜の花とは、アブラナ科の植物全般のこと。

冷たい風にも負けず、いち早くオオイヌノフグリが陽だまりで咲いています。葉は、霜のせいかわ赤く染まり、地面に張り付いたまま。それでも青空のようなブルーを煌めかせています。

畑に、一株、菜の花を見つけました。種を取るために残してあるのでしょうか、満開です。

今日から2月。今年ももう1/12が過ぎてしまったのですね。2月…如月の語源は、更に衣を重ね着するほどの寒い時期との説もあるそうです。

昨夕、今日から生活必需品が一斉に値上がりするとのニュースが流れていました。懐も寒くなりそうですが、なぜ、もっと早い時間帯や数日前から報道しないのでしょうかね。大々的な報道は、ワイドショーでも目立っては流れていなかったようです。買いだめに走るからでしょうか？ それとも・・・？



## 2022.2.2 日記(バックナンバー)がやっと再編集できました。

これまでの日記を、再編集してアップしました。メディアデータを削除していたことや、編集画面のデータのコピーができていなかったことから、特に写真の取り込みに手間取りました。続けられる限り、今後も写真に撮り、日記に記録していきたいと思います。皆さんからの情報もぜひお寄せください。

## 2022.1.31 春見つけ①～枯野を歩く～



厳寒の候、陽射しに誘われて散歩に出かけます。でも風は思いのほか冷たく、マフラーを持参して良かったア。

鳥羽川の河川敷を踏み分けて行くと、木に巻き付いた蔓に様々な実がぶら下がっています。みな枯れ朽ちた姿になっていて、名前は定かではありません。野バラの実もほとんどが熟れ過ぎていますが、まだ赤く形をとどめているものもあります。なんと青々とした葉を開き始めた株を発見。今日は、何故かサギもカワウも見かけません。魚影も川面にはありませんが、草木は着実に春を感じ取っているようです。

気を付けて歩いていたのですが、枯草を分け入ったので、ズボンには、センダングサの実がビッシリ。ちょっと厄介なお土産です。



▲熟しきったノバラの実。まだ原形をとどめている実もチラホラ。



▲青々と芽吹き始めたノバラに、春を見つけ!!



## 2022.2.1 春見つけ②～堤を歩く～



冷たい風にも負けず、いち早くオオイヌノフグリが陽だまりで咲いています。葉は、霜のせいかわ赤く染まり、地面に張り付いたまま。それでも青空のようなブルーを煌めかせています。

畑に、一株、菜の花を見つけました。種を取るために残してあるのでしょうか、満開です。

今日から2月。今年ももう1/12が過ぎてしまったのですね。2月…如月の語源は、更に衣を重ね着するほどの寒い時期との説もあるそうです。

昨夜、今日から生活必需品が一斉に値上がりするとニュースが流れていました。懐も寒くなりそうですが、もっと早い時間帯や数日前から報道してほしいなあ。大々的な報道は、ワイドショーでも目立っては流れていなかったようです。買いだめに走るからでしょうか？ それとも広告主への配慮？



◀菜の花は、アブラナ科の植物全般を指します。

日本の1年は春で始まります。立春を明日に控え、今日は、冬から春へと季節を分ける節目の節分。

季節の変わり目に生ずる邪気(夜やって来る鬼)を、窓を開けて追い出す声が、あちこちから聞こえたのも今は昔(子供が少なくなったから?)。とは言え、スーパーのチラシの目玉は、恵方巻き。江戸時代に巻き寿司が誕生して以降、関西の花柳界の節分の日の風習が始まりだそうです(太巻き寿司が始まりとする説や漬かった旬の新香巻きが最初とする説あり)。大阪の寿司屋の協同組合が戦後復活させ、平成に入り、セブンイレブンが、恵方巻きとし命名し、全国に知られることとなったと言います。

この辺りでは、鬼の嫌う匂いのイワシを食べるもの(お隣の三輪地区の一部には、柊イワシを門に飾る風習があります)、寿司を食べる習わしはありませんでした…。また、幼児にとって誤嚥・窒息の危険が潜む豆まきも、かっぱえびせんなどを代用して室内で楽しんだり、姿を変えながら節分の風習は引き継がれていくようです。

ところで、恵方巻の販売に予約制を採用するスーパーもあり、社会課題となっているフードロスの抑制を意識しているのかもしれませんがね。今朝の新聞に、気象データなどを活用した「来店客数予測サービス・食品ロス削減」の見出しが躍っています(タイミング良すぎ?)。栗野にも出店しているグループ会社では、今年中にスーパーでの実証実験を開始するそうです。

## 2022.2.3 節分







▲この店は、メインの素材をアピールした太巻き(マグロ太巻き、黒毛和牛巻きなど)。



◀メインの素材を前面に出した広告チラシ



◀様々な具材の詰まった広告チラシ

◀我が家は恵方巻の元祖とも言われる新香巻き。糠、塩と鷹の爪だけの素材な沢庵を芯にした海苔巻き。紅ショウガも自家製。これが結構うまい。

## 2022.2.6 重たい雪



昨日から今朝にかけて降った雪は、水分の多い、重たい雪でした。平年であれば、雪が積もるたびに、地温はどんどん下がり、2月の時期には地面は凍結し、夜の間に降り積もるのが常です。なのに、早朝から雪解けが始まっていました。積雪も困りものですが、重たい雪は雪らしくなくて、風情が欠ける気がしますね。

北京五輪が開幕。開会式の様子がテレビで流れていましたが、記憶にある名前がありました。大会組織委員会の蔡奇会長は、かつて、岐阜市との友好都市・杭州市の市長でした。杭州市とは、日中国交正常化以前の昭和37年に岐阜市長と杭州市長の平和と友好の碑文が交換され、翌年、「日中不再戦」の碑が杭州市内柳浪聞鶯公園に、「中日両国人民世代代友好下去（中日両国人民は子々孫々にわたって仲良くやっぺいいきましょう）」との碑が岐阜公園にそれぞれ建てられました。昭和54年2月21日(今月の2週間後ですね)に友好都市となりました。一時期、中国との関係が悪化した時期がありましたが、国とは違った立場での友好関係の維持こそ友好都市の意義として、変わらずに交流が続きました(民主主義国家であっても、国家的に交流機会を閉ざしてしまう国もありがちですが...). 栗野にも、両市の交流に貢献し、杭州市の名誉市民になられている人がいます。ネットでも、草の根でも、そして都市間が、心通わすことのできる交流には、ますます重いものがあります。



▲水っぽい雪は滴ったのか、竹がしなるまではいきません。



▲岐阜公園北の日中友好庭園に建てられた「日中不再戦の碑」  
(岐阜市ホームページより)

## 2022.2.7 花ごよみ・椿

山際に、一輪の赤い椿の花を見つけました。開花を少し急ぎ過ぎたようで、寒さのせいで花弁が痛んでいます。低いところで隠れるように咲いています(多分、ヤブツバキだと思います)。満開時期は、もう少し先になりますが、椿には雪が似合いますね。

高台の枯木の林の間から、昼過ぎになってもまだ雪が残る栗野の町が望めました。

春はもう少し、先のようにです。



▲落葉樹の間に、栗野東の町が広がります。手前の切り株には、キノコが生えていました。

▶こちらの切り株にも、サルノコシカケ型のキノコが元気です。





## 2022.2.10 雨水間近、年賀状を整理する



▲暦の上では雪から雨に変わる「雨水」…今年は10日後の2月19日です。

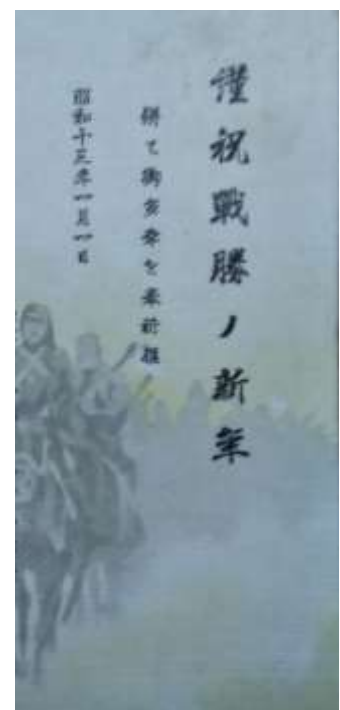


▲講談社の年賀状。当時としては珍しい挿絵入り。

寒い一日です。今朝から降り始めた冷たい雨が、みぞれとなり、ポタン雪となり、雨に戻り…こんな日は、やり残していた用事をこなすに限ります。まずは確定申告。ホームページの様式は毎年どこか改善されますが、データの保存が上手くできなかったトラウマがあり、一気に入力し、印刷まで一気に仕上げます。さして還付金がないのですが、頭の体操。

その後、年賀状の当選番号調べ。切手シートが数枚当たりました(確率は2.5%)。昨年はこの倍当たっていたのですが(結局、交換を忘れて残念なことをしました)。賀状終いの一筆が添えられていることが随分と増えました。最初にお目にかかったのは、8年ほど前だったと思います。当時はまだ珍しく、こんなことがあった、と話す周囲は驚いていました。

一時期収集していた古い年賀状を思い出し、久しぶりに取り出してみました。今のようにイラストを施したものは少数ですが、墨書、達筆はもとより、今はお目にかかれぬ活字が工夫されたレイアウトに配された、格調漂う賀状は、庶民に根付いた芸術とすら思えます。歴史背景も透けて見えます。平安時代に始まったとされる年賀状やあいさつ回りも、やがてはメールにとって代わられるのか、それとも新年のあいさつそのものが消えていくのか、はたまた姿を変えて引き継がれていくのか…。



▶時代背景を映し出す年賀状。

## 2022.2.11 足下の宝石



日差しが降り注ぐ暖かな日。真っ青な珠(たま)が、地面に落ちています。グランドカバーとして木の根元などに植栽されるジャノヒゲ(リュウノヒゲ)の実です。名前のように髭のような細い葉が、地面にこんもりと繁るため、花も実も葉に隠れて目立ちません。葉をそっと押し退けて見ると、色鮮やかな実を沢山つけています。地面に一粒転がっていなかったら、気付かないところでした。日常の幸せと同じですね。

青い鳥がシンボルマークのコミバス“ぐるっとバス”が、2年余りの試行期間を経て、4月から念願の本格運行に移行します。多くの皆さんの努力と協力が実を結んだものです。利便性向上に向けた取組はなお続きますが、その歩みはまちづくりのモデルケースと言えるでしょう。

## 2022.2.15 春見つけ③～ちらほらと～



木造町の護国寺の境内に梅がちらほら咲き始めています。それにしても、今年は梅の咲くのが遅いような。昨年(1月8日)の日記を見ると、早咲きの鹿児島紅梅が雪の中で咲いていました。2月3日には、鷲山地区で白梅が咲いていましたが、今日はまだ蕾は膨らむ準備中。今季は雪が降る日が多かったせいか、2週間以上の遅れです。

季節は「魚上氷(うおこおりをいずる)」候、凍った水の中でも魚が活動し始める季節と言います。確かに、栗野台の貯水池に張っていた薄氷を見る日も少なくなりました。

とあるスーパーに、春の山菜コーナーがしつらえられました。昔は栗野のスーパーにも並んでいたギボウシの若芽(ウルイ)も発見。ささやかですが、春の先取りを演出しています。

またもや大雪の予報、春はもう少し先ようです。



▲コゴミ、タラの芽、ウドと一緒に、昔はよく見かけたウルイ(ギボウシ)も並んでいました。

▶1月半ばには貯水池に薄氷が張っていましたが、少し寒さも緩んできたのでしょうか、見かける日が少なくなりました。





## 2022.2.17 古い絵ハガキ～模擬城～



▲ドウダンツツジの枝に朝から降り積もります。

今日は、朝から雪が降り続く寒い一日。着雪注意報(断線被害などが発生するおそれ)が発令されました。木々の枝や常緑の葉に雪が積もる一方、地面の雪は溶けていきます。1943年の今日、岐阜城の模擬天守が焼失しました。展示されていた織田信長の遺髪などの資料も失われたそうです。写真は、「岐阜名勝」として当時の模擬城天守閣と長良橋の絵葉書(印刷年次は記されていません。岐阜市歴史博物館の収蔵絵葉書を検索しても見当たりません)。

## 2022.2.18 花ごよみ・クリスマスローズ&ローズマリー



▲ドウダンツツジの芽が寄り添うように伸びています。

北に面する室内のガラス窓の水滴が凍り付いていました。庭には、クリスマスローズが咲き始めています。今でこそ馴染みの深い花ですが、半世紀前は、通販で入手し、園芸店に並ぶことはありませんでした。今では、品種改良も盛んにおこなわれていますね。そう言えば、街路樹に植えられるハナミズキも同時期、植木屋に小さな苗木が出回り始めました。思えば、園芸の世界にも新しい波が押し寄せつつあったのでしょうか。ローズマリーが団地の玄関先で薄紫の花を付けていました(ハーブが広まり始めたのは、更にずっと後のことです)。近くにもハーブをテーマにした施設には、山県市の[四国山香りの森公園](#)(ハーバスに乗り継いで行けます)が、クリスマスローズの庭園は、[かみいしづ緑の森公園](#)(大垣市の飛び地合併した上石津町ですから、ちょっと遠く、栗野から車で1時間はかかります)があります。春よこい…♪



## 2022.2.21 野には淡雪



昨日、目覚めると雨水に当たる 19 日から夜半に降った雨が、屋根の雪をすっかり洗い流していました。まさに雪解雨(ゆきげあめ)。一転して、今朝は粉雪が舞いました。

北京五輪が昨夜閉幕しました。最年少メダリストとなった岐阜市出身の村瀬心椛選手はじめ県勢 3 選手が銅メダルを獲得するなど、我が国に最多のメダル数をもたらした今大会ですが、日本選手の笑顔と涙がこれほど印象的だったことはなかったのでは。一方、運営面などで、後味の悪い大会ではありました。

季節は、土脉潤起(つちのしょううるおいおこる)・・・雨が降って土が湿り気を含む頃。まだまだ寒さは続きますが、淡雪の下で新たな息吹が感じられます。

◀雪解雨に、日陰の雪も溶けていました。

一転、朝から粉雪の舞う寒い一日となりました。とは言え、うっすらと積もっていた雪もいつの間にか溶け、積もることはありません。今季は雪の日が多かった(岐阜市内でも 30 日を超えたとか?)。昨年日記を見ると、2 月 13 日には庭の梅の根元でフクジュソウが花開き、2 月 25 日には、その梅も満開に。今年は、ようやくフクジュソウの花芽が雪の下で膨らみ、梅の蕾は固いまま。日記は、季節の移ろいが感じられとともに、平年とのテンポの違いも分かります。

ホームページの 1 月 29 日の介護予防教室の記事にありましたが、「昨日の日記をつける」のが認知症予防に役立つとか。金もさしてかかりませんし、おすすめ。

今日は、2022 年 2 月 22 日。200 年後には、2 だけが並びます。暮らしはどのように変容しているのでしょうか?徒然なるままに…あなたの日記が、貴重な記録となるかもしれません。

## 2022.2.22 日記の効用



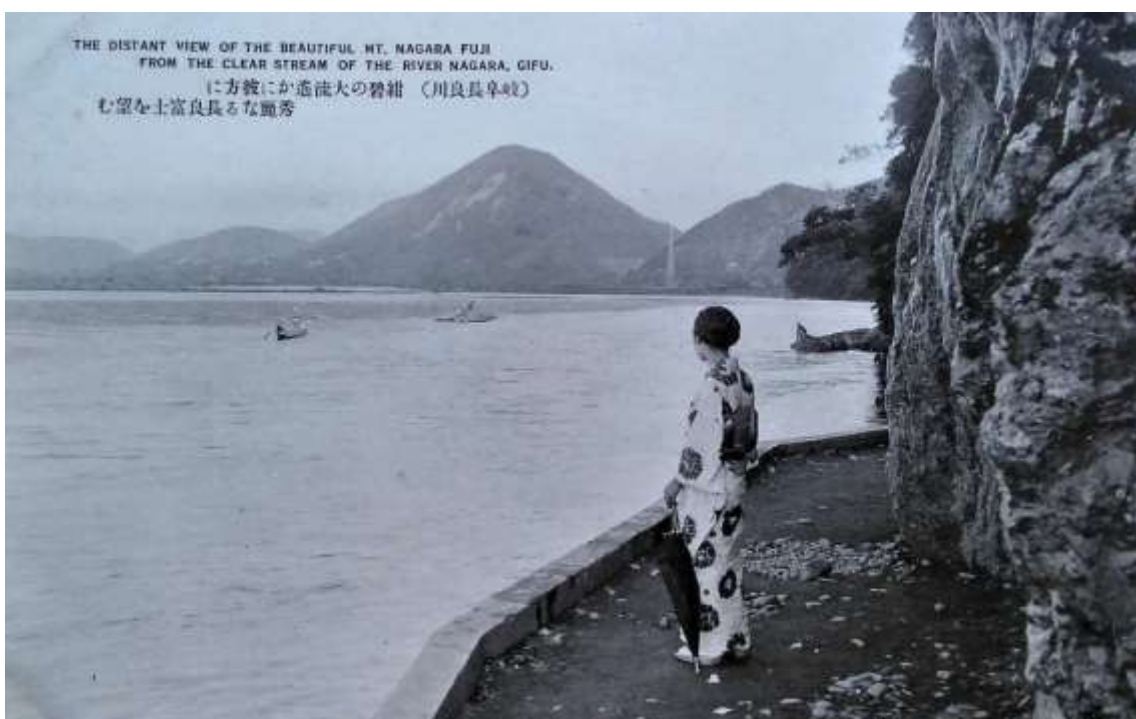
▶梅の木の根元で、ようやく花芽を付けたフクジュソウが雪化粧。





昨日2月22日は、にゃんにゃんにゃんのごろ合わせで「猫の日」ですが、1222年の鎌倉時代以来、800年ぶりのスーパー記念日「スーパー猫の日」だったとか。

今日2月23日は、「富士山の日」だそうです。富士山と呼ばれる山は、全国に340ありますが、実際にはもっと多いのでは？ 市内にもあります。長良橋から上流を眺めると、川の真ん中筋に秀麗な姿を見せる山が、「長良富士」です(美濃富士と言う人もありますが、戦前の絵葉書には「長良富士」の表記が見られます)。今は鵜飼い大橋がかかり、山には貯水タンクが設置されるなど事態とともに環境は変化しましたが、鵜飼情緒を高めてくれる景観の一つであることに変わりはありません。トップ写真にも、「長良川清流と長良富士」と紹介されています。



▲「紺碧の大流遥かに彼方に秀麗なる長良富士を望む」と記された絵葉書。

2022.2.25 あげぼの



春はあげぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる・・・言わずと知れた清少納言の枕草子の書き出し。世界初の随筆で、徒然日記、方丈記と並ぶ、日本三大随筆の一つ。平安中期の 1001 年頃の作と言いますから、約 1020 年前に記されたもの。宮仕えしていた筆者が、7 年間にわたり綴ったものとか。この冒頭の一節が、まさに早朝のシーン(トップの写真は 6 時 30 分撮影)。

ロシアがウクライナに侵攻しました。ロシアのリーダーの狂気の顔が、テレビや新聞紙面に醜くクローズアップされています。世界の多くの人々が怒り心頭かと思う一方、自由と平和の物差しは、人類共通ではないことをあらためて思い知らされます。 時を隔てても、なお不変の価値が認められても、地域を隔てたとき、私たちが願う価値基準は残念なことに脆弱です。

バイパス上空のデジタル看板は、昨日のマイナス 3 度に対し、今朝はマイナス 2 度を表示しています。春、なお浅し。



▲栗野東方面。眉山(右端)が赤く輝いています(6時37分撮影)



▲栗野西方面。眉山(左端)から西、北の景観(6時40分撮影)